

# 総合病院 伊達赤十字病院への 財政支援について



問 保健センター予防係 (☎23-3331 内線632)

市では、伊達赤十字病院へ平成22年度から平成25年度まで毎年2億円の財政支援を行っています。

そこで、今月号ではこの支援へのご理解・ご協力をいただくため、その理由や支援にいたる背景などをお知らせします。

## 市が支援を決定した理由

伊達赤十字病院は、昭和15年の開院以来、胆振西部の中核病院として、伊達市民はもとより地域住民の生命と健康を守ってきました。

しかし、近年の医療を取り巻く環境は大きく変化し、慢性的な医師不足による診療科目の減少などで厳しい経営状況に置かれています。

「医療機関の充実」は市民生活やまちづくりの基本であり、特に一刻を争う「救急医療」の面で同院がなければ、室蘭市内の基幹病院に頼らざるを得ません。

また、「病気予防」の面でも多様化する予防接種や健診の担い手として同院が果たす役割は重要です。

同院は、これまでも日本赤十字社本社からの医師派遣、病院診療にかかる経費削減を行うなど経営改善を図ってきましたが、いまだ確実な回復には至っていません。

そのため、市は地域医療の確保・充実のために、同院の財政支援を決定しました。

## 支援が必要になった背景

- 平成10年以降に行われた診療報酬のマイナスイ改革
- 平成16年度から始まった新医師臨床研修制度で、研修医は幅広い知識と経験を積むべく、大病院だけでなく、広くさまざまな病院などで研修を行うことになったため、大病院の医師が不足し、結果的に地方の病院に派遣する医師が不足した。
- 産婦人科や小児科など、医師への負担が大きい診療科の医師不足
- 循環器科・眼科・皮膚科の固定医師の減員で、外来や入院患者が減少した。
- 高度医療技術に対応するための医療機器購入費用の負担増など



## これからの伊達赤十字病院

今年度の診療体制は、4月から武智茂医師が新院長に就任し、17診療科・医師27名体制で行い、経営陣も新体制になりました。

また、同院では経営改善の一環として、昨年10月に一般病棟の1病棟を療養病棟に転換しました。

療養病棟は、急性期の治療を終えても引き続き医療の必要度が高い患者さんや慢性疾患で症状は安定しているも継続して療養が必要な患者さんのために開設された入院病棟です。

市でも、これまで北海道や国に対し、胆振西部地域に不足している内科、呼吸器科、循環器科医師の確保に向けた要望を行っているほか、伊達赤十字病院でも診療科の充実のため、医師の確保に向け独自の取り組みを進めています。

市としましては、今後も同院がより良い医療サービスの提供とともに市民の皆さんとの信頼関係を構築できるよう、自主的な経営改善に向けた努力が進められているか注視していきます。



## 伊達赤十字病院の経営の状況と今後の方向性について

本年4月、前田喜晴前院長から引き継ぎ、伊達赤十字病院院長を拝命しました武智茂です。今後は微力ながら当院の運営のために全力を尽くす所存ですので、よろしくお願いいたします。

以前から当院の経営状態が悪化していることは、皆さまご承知のことと存じます。そのため市の財政が厳しい折にも関わらず、この数年、毎年2億円の財政支援をしていただいていることは、大変有り難く心より感謝申し上げます。また、今回、利用者の利便性を考えた多方面からの御支援にも感謝致します。

平成25年度は、総収支で黒字化を目指し職員一丸となって頑張ってきましたが、残念ながら目標に達することができませんでした。本年度も、まずは総収支の黒字化を目標に頑張っていきたいと考えております。当院は以前から地域の中核医療と救急医療の両面を担っておりますが、医師不足で全ての診療科について対応が十分できない状況です。それで

も、少ない医師がお互い協力し、対応を努力しています。このような現状から、今後も医師の確保に全力を尽くします。特に高齢者の多い地域ですので整形外科や内科系の医師確保に努力したいと思います。

また、本年度は病院独自型の臨床初期研修医の先生が着任することになりました。病院が活性化する良いきっかけになります。

更に今後の増収を達成するための対策として、昨年10月から7階病棟に療養病棟（44床）を開設いたしました。今までの急性期、亜急性、障害者各病床に加え、新たに療養病床による医療が加わることで、当院の中で医療の完結を目指し、病院経営の安定化に繋げていきたいと考えております。

今後の病院の方向性については、地域の皆さまのご意見をうかがい、その中で当院が果たさなければならぬ役割を考えてまいります。引き続き当院への御理解、御支援をお願いいたします。

伊達赤十字病院 院長 武智茂